



タイトル Title	神戸開港について(Open a Port of Kobe)
著者 Author(s)	一坂, 太郎
掲載誌・巻号・ページ Citation	海事博物館研究年報,36:7-8
刊行日 Issue date	2008-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81005799
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005799

神戸開港について

萩市特別学芸員

山口福祉文化大学特任教授 一 坂 太 郎

1. 「幕末」とは、天皇が政治的発言を急速に強めた時代である。天皇は将軍の上に位置する権威だ。しかし元和元年（1615）、幕府は「禁中並びに公家諸法度」を定め、天皇の役割を「天子諸芸能のこと、第一御学問なり」として、政治から遠ざけていた。それが200年以上続いた。

ところが弘化3年（1846）2月、皇位に就いた孝明天皇は、度重なる異国船来航に強い関心を示し、危機感を持つ。このため幕府は、異国船情報に関して差し支えのない範囲で、天皇の耳に入れることを決めた。ただし幕府は、天皇を政治に参加させようとしたのではない。天皇の命で朝廷とゆかりの深い全国の社寺が、異国船撃退の祈祷を行えば、国民が安心するだろうと考えたからである。天皇を宗教的権威として、利用しようというのだ。

嘉永6年（1853）6月、4隻の黒船を率いて江戸湾に姿を現したアメリカのペリーは、武力を背景に幕府に開国を迫る。その結果、安政元年（1854）3月、「日米和親条約」が締結された。ここに日本は、開国への第一歩を踏み出した。ただしこの条約は、下田・箱館での食料や燃料の補給、漂流民の保護などが決められたに過ぎず、自由貿易については触れられてはいない。孝明天皇も人助けの条約と解釈したようで、賛意を示している。

つづいて安政3年に来日したアメリカ領事ハリスは、江戸に乗り込み、幕府要人に世界情勢を話して聞かせ、全面的な開国が必要であると説く。その結果、安政5年6月に自由貿易を骨子とした「日米修好通商条約」が締結された。ペリーが半開きにして去った日本の扉を、ハリスが全開させたのだ。一旦起こった開国の波は止まるところを知らず、続いてオランダ・ロシア・イギリス・フランスとの間に同様の条約が締結されてゆく。これを安政の5カ国条約と呼ぶ。

ところが、これら修好通商条約を締結することは、外国嫌いの孝明天皇は反対していた。にもかかわらず、幕府は勅許を得ずに調印を実行した。

このため、幕府に対する批判の声が高まる。

2. 日米修好通商条約をはじめとする安政の5カ国条約の中で、兵庫開港が決められた。当初は文久2年（1862）11月から開港されるはずだったが、孝明天皇の反対、攘夷論の高まりなどから、とても実現出来る雰囲気ではない。そこで幕府は文久元年12月、竹内保徳を全権とする使節団をイギリスに送り、交渉させた。その結果、新潟・兵庫の開港、江戸・大坂の開市の延期を承諾させる。他の諸国もイギリスに同調したため、幕府はひとまず安心した。

新しい期限に決まったのは太陽暦の1868年1月1日、日本の暦で言えば慶応3年12月7日である。その後、紆余曲折があったが孝明天皇は慶応元年（1865）10月5日、締結から7年を経てようやく条約の大半を許した。それは、禁裏守衛総督などを務め、天皇との信頼関係があつかった一橋（のち徳川）慶喜が説いたことが大きい。ただし、京都に近い兵庫の開港だけは認めなかった。この兵庫開港の問題を残し、孝明天皇は慶応2年12月25日、36歳で突如崩御する。翌3年1月9日、踐祚（即位）した明治天皇は16歳であった。

15代将軍となった徳川慶喜は慶応3年3月の5日に、朝廷に兵庫開港を許可してくれるようお願いしたが、いずれも却下された。さらに22日にも願い出たが、却下された。孝明天皇が亡くなったとはいえ、朝廷内にはまだ攘夷論は根深く残っていたのだ。

それでも慶喜は諦めない。2度却下されたにもかかわらず、3月28日にイギリス・オランダ・フランス、4月1日にはアメリカの代表と大坂城で会見し、兵庫開港を約束の期限までに実行してみせると言い切った。討幕派の薩摩藩などは兵庫開港が失敗し、幕府の国際的信頼が失われると予測したほどだ。さらに薩摩藩は、朝敵の烙印を押されたままの長州藩の寛大な処分を決定するのが先

であると朝廷に訴えるなどして、時間を稼ごうとした。

だが慶喜は朝廷に乗り込み、長年の懸案である兵庫開港と長州処分を同時に勅許されたいと、求めた。5月23日午後8時から翌24日午後にかけての長い会議で慶喜は奮闘し、兵庫を開港しなければ国際的信頼を失うと力説して、朝廷内の反対派を説き伏せた。そしてついに慶喜は、兵庫開港の勅許を獲得するに至る。慶喜の完全勝利であった。これに驚いた討幕派は、幕府が朝廷を掌握したと解釈し、武力による幕府打倒の実現に拍車がかかる。

3. 西国街道の宿場で、国内貿易の拠点でもあった兵庫は人家が密集しており、外国側も住民側も開港地とすることを望まなかった。そこで東隣の「神戸」と呼ばれる地域が、開港地に決まる。神戸は神戸村・二ツ茶屋村・走水村からなる、寂しい田舎だった。こうして兵庫開港は神戸開港となったのだが、この点にかんして異議を唱える者はいなかった。

ともかく開港期限は、慶応3年12月7日（1868年1月1日）に迫っている。幕府は7月に外国奉行と大坂町奉行を兼ねる柴田日向守剛中を「兵庫奉行」に任じ、急ピッチで居留地の造成を進めた。工事を請け負ったのは神戸村庄屋の生島四郎太夫だ。こうして西は鯉川、東は生田川、北は西国街道、南は海岸線までの約7.5万坪に居留地が造成されてゆく。

ところがこの間、幕府にとり大変な事件が起こる。10月14日、慶喜が大政奉還を朝廷に願ひ出て、15日に許可されたのだ。ただし、この時点で慶喜の実権がただちに失われたわけではない。朝廷は諸侯を集めた会議を開き、今後の政治形態を決めようとする。それまでは徳川氏が従来とおりの内政も外政も担当して、従来とおりの業務を続けるのだ。慶喜にすれば高まる討幕派の攻撃をかわし、合法的に新政権のトップに立とうと考えたのだろう。だから、全国総石高の4分の1を占める徳川直轄領と旗本知行地などの広義な意味での天領は手放してはいない。そしてこのことは、神戸開港の歴史と深く関わる。

討幕派は新政権のもとで、神戸開港を行いたかったようだ。しかし、なかなか諸侯会議は開かれな

い。ついに12月7日を迎え、神戸開港式典が盛大に挙行された。会場は居留地脇に建てられた運上所、のちの税関である。神戸では初めての洋館で、窓にガラスがはめられていたことから「ピロードの館」と呼ばれていたという。兵庫奉行柴田をはじめとする幕府関係者、外国代表が列席し、各国仮領事館には国旗がひるがえり、海上に停泊する18隻のイギリス・アメリカ軍艦からは祝砲が放たれた。このように神戸は、大政奉還後の慶喜の手により開港されたのだ。

ところがその2日後、諸侯会議も開かれぬまま強引に「王政復古」の大号令が発せられ、ここに幕府政権は完全に消滅する。そして、総裁・議定・参与からなる新政権（維新仮政府）の名簿中に、慶喜の名は無かった。こうした仕打ちに対する幕府関係者たちの怒りは、翌年の戊辰戦争となって火を噴くことになる。

4. 神戸開港は260年以上の永きにわたり日本を統治した、徳川幕府が最後に行った大仕事だと言えよう。洩る朝廷の許可を取り付け、期日までに神戸開港を実現させ、国際的信用を失わせなかった慶喜の功績は大きい。

ところが、神戸の歴史において慶喜の名はさほど重視されているとは思えない。神戸には慶喜を顕彰する碑などは、建てられていない。建てようとする計画があったとも聞かない。これは想像するに、幕府を倒して生まれた薩長出身者を中心とする新政権が、徳川の功績を歴史に刻むことを極力嫌ったことと無縁ではないだろう。神戸開港という「歴史」は、明治初期の「文明開化」と重ね、イメージが築かれていった。

神戸開港のさい、外国人との衝突を避けるため、幕府は西国街道の付け替えを行っていた。居留地を避け、石屋村から石屋川に沿って北上し、柚谷、摩耶山裏、小部、藍那、白川、高塚山などを通り明石大蔵谷に出るという道筋だ。ところがこの道は、居留地を小迂回する市内の道が開かれたため不用となってしまった。だが明治の終わりころより、山中を通るためハイキングコースとして利用されるようになり、人々は「徳川道」と呼ぶようになった。新政権により封建時代を象徴するようなイメージを与えられた「徳川」の名が、神戸の道に付けられている。庶民は、真実を知っていたのだろう。